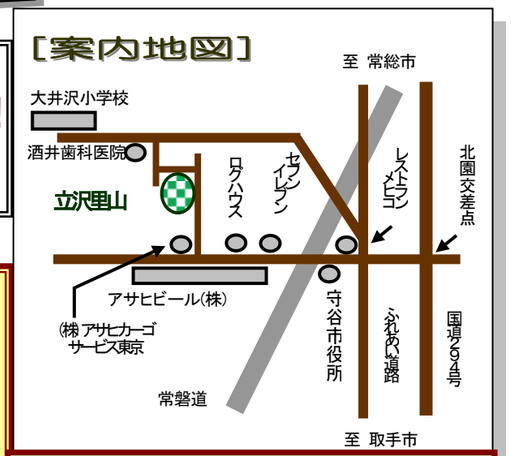
立沢里山 里山新聞 第17号

平成21年8月15日

発　行：立沢里山の会　代表　鈴木　榮
問い合わせ先：事務担当
須　賀（守谷市役所内 45-111 内線 351）
立沢里山ホームページ
http://www.geocities.jp/tatuzawasatoyama/

ボランティア募集
あなたも一緒に楽しみましょう！



～目次～
1　古代米の文字現れる
2　草取りに子供たちも参加
3　山百合の自生地を巡るバスツァー：7月18日
4　取水堰の改修と水管理について
5　大賀ハス移植とザリガニ、ヒメダカ捕獲
6　竹炭の加工
7　里山再生と資源循環

「立沢里山新聞」の記事をお願いします
denen21@hb.tpl.jp　清野

1　古代米の文字現れる

5月19日(火)の田植えに少し遅れて23日（土）に古代米を田植えしました。

苗は赤法花の守谷森林クラブからいただいたもので、全部で赤米、黒米、緑米など4種類があります。東端の道路沿いに昨年新たに開田した田んぼに、平仮名で「もりや」とデザインしてみました。（上の写真）一応、ビニルテープで概略の寸法を測って描いてみましたが、結果がどうなるか実は誰もわかりません。

概ね一月が経って、稲も生長してくると何となくそれぞれの色が出てきて、文字らしきものが見えてきました。（右の写真）ところが、若干ですが苗の選定を間違えて田植えしてしまったようで、配色がおかしくなっているのに気がつきましたが、まあ、これくらいは問題ないだろうと大目に見ることにしました。

古代米を知らない通行人からは、異様な田んぼの色をみて、何かの病害虫の被害にでもあったのですかと聞かれました。聞かれてみるとなるほどとも思いますが、昔の稲はこんな色で米も白くはなかったのですと説明しました。（左が最近の写真）

古代米の田植え

また、稲が生長すれば、文字を読み取れるようになるはずと思っていましたが、種類によって背丈にかなり差が出てくることがわかり横から見ても判読できません。来年は上から見下ろせる場所にしたいと思います。

2　草取りに子供たちも参加

6月20日(土)は定例の作業で、5月に田植えしてから最初の草取りを行いました。

当日は雨も上がり、9時前から小学生30数名と先生も参加してくれました。

今回は会員だけの作業ではないので、いつもとはかなり雰囲気が違います。

皆元気一杯で、キャーキャーいいながら田んぼに入って汗だくか泥だらけか不明ですが、夢中になって草取りや補植作業を行いました。

立沢は湿田なので、子供達が皆で騒ぎながら素足で歩くことによって根周辺のガス抜きにもなるので稲のためにも都合がいいことなのです。

一時間ほどで作業は終わり、取水堰や上総掘りの井戸水で手足を洗って、休憩。途中から日が差してきて暑くなってきたので「里山の会」が差し入れしたアイスクリームが好評でした。

その他、畦のモグラ穴の漏水修復を数箇所、土手道の草刈、昨年の大雨の経験から取水堰を改造することにしました。

作業をしていると、子供達が何をしているのだろうと興味を持って大勢集まってきて、その場所で手足を洗ったり遊びだして賑やかでした。

元気にはしゃぐ子供たち

3　山百合の自生地を巡る：里山バスツァー

山百合は守谷市の花にも指定されており、かつては市内のいたるところに自生していたと言われます。しかし、開発などの影響で限られたところにしか残っておらず、守谷の里山を象徴する存在でもあります。

そこで、守谷市生涯学習課と「守谷里山ネットワーク」、「守谷山百合の会」が協力して、環境移動講座の一環として自生地巡りのバスツァーを企画しました。

7月18日（土）当日は雨も上がり歩きやすい薄曇の天候で、参加者約40名が午前8時頃、市役所のバス停から「やまゆり号」に乗車して出発です。

満開のヤマユリ：立沢周辺

最初は大山新田の自生地で地主のKさん、山百合の会の努力で集落周辺や屋敷林に見事な山百合が咲いていました。山百合は種を蒔いて一年目は土中で芽を出し、2年目で小さな葉が地上に出て、花が咲くまでには5年目くらいかかる。10数年たった古い株は最後に小さな沢山の花を咲かせて枯れてしまうとのこと。最後に平たく変形した茎も観察できました。

その後、四季の里、やまゆり公園、立沢里山を巡って国際交流センター（ログハウス）で昼食と説明会。山道や里道をかなり歩きましたが、いずこもちょうど満開の盛りの季節で自生の山百合の素晴らしさを満

山百合の里：大山新田

市バス：やまゆり号

喫できました。

最後に高野公民館へ移動し、山百合の会が栽培している庭を観察し、育て方などについて具体的な説明が行われました。今回はちょうど市のコミュニティバス「やまゆり号」が７月一杯で廃止になる予定で、最後の記念乗車になりました。バスはなくなっても「山百合」はなくならないように、皆で保護活動などに取り組みたいものです。

４　取水堰の改修と水管理方法について

今年は取水堰、畦などをしっかりと改修し、８月上旬までは大雨も少なく水管理も楽で、中干しも終わり、稲は順調に生育しています。

誰でも水管理できるように、堰構造と水管理方法を簡単に説明します。

堰周辺の水の流れの優先順序は右写真で、①魚道、②左岸取水、③右岸取水、④越流堰、⑤バイパス側水路の順番としています。越流堰は角落とし堰にしてあり、堰板の取り外しで取水位を調整します。大雨が予想される際は堰板をはずしてあらかじめ水位を下げておきます。最大洪水にはバイパス側水路からあふれ、畦などに被害が出ないようにしています。昨年は落水の勢いで下流が浸食されて堰底が抜けたことから、水タタキとしてコンクリートブロック（エプロン）を設置しました。**下の写真**が８月１０日大雨の際の状況ですが、越流堰の容量を超える水量はバイパスから流れ、下流洗堀も起きていません。（実はほっとしました）

日常の水管理は、堰で取水位を一定にしてありますので、左右岸取水口の流入口パイプ先端を伸縮させて取水量を調整します。田んぼの湛水深は出口側のパイプ先端を伸縮させて調整します。簡単に出来る分、子供でもいたずらできますので、里山を通りかかった際は点検をお願いします。

極端な旱魃の際には上流池の堰板をはずして貯水池の水を間断注水するか、井戸（上総掘り）からポンプ揚水することになります。７月に中干しで一旦落水し、穂が実り出したら取水停止します。「冬水田んぼ」をする場合は湛水する最低量を取水します。

また、池の流出口に水質浄化用として竹炭を土嚢袋に三つ設置してみました。

５　大賀ハスの移植とザリガニ、ヒメダカの捕獲

８月１日（土）に浚渫した池にハスを移植しました。須賀さんが自宅で種から育てた「大賀ハス」で、来年花が咲くことを期待しています。ところが、ザリガニ除けに波板で一部保護してみましたが、保護しなかった箇所は完全に切り取られてしまいました。実は今春にもスイレンやコウホネを移植したのですが新芽が完全食べられてしまいました。浚渫攪乱した後の異常繁殖とも考えられます。また、外来種のヒメダカもかなり確認できるようになりました。

そこで、８月８日(土)ザリガニとヒメダカの捕獲作業を実施しました。池の水を抜いたのでザリガニは簡単に手掴みできるのですが、ヒメダカは賢く逃げ足が速いのでなかなか掬えません。二時間ほどでザリガニはバケツに二杯、数百匹は捕獲できました。「大柏里山の会」でＴＸ夢彩都の祭りで活用して頂ける事になりました。ヒメダカは観賞用に持ち帰りました。

６　竹炭の加工

炭焼きの先輩である「七郷里山の会」は焼いた炭をいかに有効に使うかが一番難しいと言っていました。

６月７日に炭窯から取り出した「立沢里山」の竹炭は、とりあえずは北守谷夏祭りに向けて検討することになっています。

昨年の夏祭りの経験から、炭に興味のある人とない人の差が大きいことから、皆が、特に子供が興味を持てるようにデザインなどに工夫が必要なことです。また説明パンフレット「守谷の竹炭を暮らしに！」のビラを作成しました。

試作品として木の実に目玉をつけて「真っ黒くろすけ」を作成してみましたがいかがでしょうか。ただ、木の実の炭は触ったり衝撃に弱く壊れやすいので竹の節部を使って保護枠を兼ねた台座にしてみました。少しアレンジして親子ペァーや首振り、起き上がりタイプなども考えました。その他、ドングリ、ハスの実、松ぼっくり、栗、みかん、竹葉などもありバスケット盛りなど順次検討します。

最終的には竹炭は定尺に切って、脱臭用、炊飯用、水質浄化用などに袋詰めにしてまとまった量として販売する必要があります。

竹酢液についても来年にむけて商品化を考えましょう。

７　里山再生と資源循環について

里山は手つかずの自然ではなく、長い年月をかけ農林業活動等により管理保全されることによって形成された独特の二次的な自然環境です。しかし、エネルギーの化石燃料等への転換や化学肥料の普及などにより、薪炭林や有機肥料の採取地としての必要がなくなり、放置されるようになりました。

守谷市の花でもある山百合やニリンソウはそのような里山の特性に順応し、かつては市内のいたるところに観られましたが、最近は本当に限られた箇所にしか存在しなくなりました。

その原因は開発だけではなく里山に人の手が入らず生育環境が大きく変化したことにもよるのです。
それなら里山はなくなってもいいのでしょうか。今では里山は日本人の原風景、文化、財産となっており、子供達が自然と触れ合い遊びの場、大人の癒しの場であり、何よりも様々な日本固有種が生息する生物多様性にとっての重要な空間となっています。

今までは農林業が結果的につくる環境にただ乗りしてきたとも言えます。今後は、環境、癒しなど里山の多面的な機能を正しく評価し、新たな視点で機能再生、保全して行く必要があります。

一方、経済、科学万能主義への反省もあり、お金をかけなくても生活を豊かにする貴重な空間として、新たな価値を創設する時代でもあります。そのためには里山に人間の手を入れる新しい資源循環の仕組みが必要です。

里山の会の「炭焼き」はささやかながらその挑戦、試行でもあります。竹林や屋敷林に手を入れると、発生する枝葉の処理が問題となりますが、炭にすることにより、従来の燃料や肥料に代わる新たな価値を創出できればと考えています。

昔から、脱臭、水質浄化、土壌改良、防虫、癒し、アートなど様々な効用が知られてきましたが、真に豊かな生活、環境の質向上のために有効に活用できたらと思います。

たかが遊び、されど遊びの「真っ黒くろすけ」の言い分です。

（環境再生医Ｓ野記）